『往生論註』の思想材としての『大智度論』

服部純雄

道宣『続高僧伝』巻第六には、曇鸞を「於二四論仏性一弥所二窮研一。[1]」と記している。この中、彼が『大智度論』（以下『大論』と記す）を修学した点は、彼の著述である『往生論註』（以下『論註』と記す）に同論が多く引用されていることによっても明白である。この『大論』には、被註釈経典である『大品般若経』の説を受け、菩薩が浄仏国土成就衆生を行なうことが記されている。『大論』が説示する菩薩の浄仏国土行により建立される清浄仏国と、『論註』に説示される曇鸞の極楽の理解との相違について若干の考察を行なってみたい。

平川彰氏は曇鸞の極楽の理解に関し、『浄土論註』では、『浄土論』で「安楽国」とか「安楽世界」と表現されていたものを、「安楽浄土」と表現し、安楽国がすなわち浄土であることを徹底せんとしている[2]」と述べられている。氏の指摘に加え、曇鸞が極楽に対し「清浄土」、「清浄仏国土」、「清浄仏土」と云う表現を用いている点が注目される。「清浄仏国土」と云う語は既に『往生論』では「菩薩智慧心方便心無障心勝真心。能生二清浄仏国土一応レ知。[3]」として使用されているが、これをより広く用いた曇鸞は極楽を清浄仏国であると明確に理解していたと云えよう。他に『往生論』では極楽の清浄性が「安楽国清浄　常転二無垢輪一[4]」、「一法句者。謂清浄句。清浄句者。謂真実智慧無為法身故。此清浄有二二種一応レ知。何等二種。一者器世間清浄。二者衆生世間清浄。[5]」と示され、曇鸞にとっては自明のことであったと云えるが、かかる極楽の清浄性を強調した彼の意図は何であったろうか。

曇鸞は『論註』巻上　妙声功徳の註釈において、極楽を次のごとく理解している。「釈論言。如レ斯浄土非二三界所摂一。何以言レ之。無レ欲故非二欲界一。地居故非二色界一。有レ色故非二無色界一。蓋菩薩別業所レ致耳。[6]」。これは『大論』巻第三十八に、「他方仏国雑悪不浄者。則名二欲界一。若清浄者則　Ⓐ無二三悪道三毒一。乃至無二三毒之名一。Ⓑ亦無二二乗之名一。亦無二女人一。Ⓒ一切人皆有二三十二相一。Ⓓ無量光明常照二世間一。Ⓔ一念之頃

作二無量身一。到二無量如恒河沙等世界一。度二無量阿僧祇衆生一。還来二本処一。Ⓕ如レ是世界在二地上一故不レ名二色界一。無レ欲故不レ名二欲界一。有二形色一故不レ名二無色界一。諸大菩薩福徳清浄業因縁故。別得二清浄世界一出二於三界一。」（Ⓐ〜Ⓕは著者符す）とある内のⒻに基づくものである。曇鸞がこの『大論』に基づいて極楽を説明したのは、彼が右のⒶ、Ⓒ、Ⓓ、Ⓔの記述が浄土経典等の説示する極楽の相と近似しているために、右の『大論』が示す他方清浄仏国の一に極楽が該当すると理解したからであろう。また『大論』巻第九十二には「有二仏国土一一切樹木常出二諸法実相音声一。所謂無生無滅無起無作等。衆生但聞二是妙音一不レ聞二異声一。衆生利根故便得二諸法実相一。如レ是等仏土荘厳名為レ浄二仏土一。如二阿弥陀等諸経中説一。」[8]として、極楽が清浄仏国であることが示されている。さらに『大論』巻第三十八には、三種の菩薩を説く中、利根の菩薩について「菩薩亦利根心堅久集二福徳一。発心即与二般若波羅蜜一相応得二六神通一。与二無量衆生一共観二十方清浄世界一而自荘二厳其国一。如下阿弥陀仏先世時作二法蔵比丘一。仏将導遍至二十方一示二清浄国一。令レ選二択浄妙之国一。以自荘中厳其国上。」[9]とあり、清浄仏国である極楽が、菩薩の浄仏国土行により建立された国土であると示されている。このように『大論』では、菩薩が浄仏国土行により建立した清浄仏国の相を説く所において、浄土経典等が説示する極楽の描写と近似した描写を行なっており、またその一例として法蔵菩薩の極楽の建立を記している。これは既に先学が指摘されるように、『大論』及び『大品般若経』の成立背景に浄土経典が存在していたからであるが、かかる事情を知るよしもない曇鸞にとっては、これらの類似を通して極楽を菩薩が浄仏国土行によって建立した清浄仏国であると理解したと考えられる。即ち曇鸞は『論註』において、極楽を理解して「従二菩薩智慧清浄業一起。荘二厳仏事一。依二法性一入二清浄相一。」[10]・「性是本義。（中略）又言積習成レ性。指二法蔵菩薩一。集二諸波羅蜜一積習所レ成。亦言レ性者是聖種性。序法蔵菩薩於二世自在王仏所一悟二無生法忍一。爾時位名二聖種性一。於二是性中一発二四十八大願一修二起此土一。即曰二安楽浄土一。是彼因所得。果中説レ因故名為レ性。」[11]・「安楽是菩薩慈悲正観之由生。如来神力本願之所建。」[12]・「安楽浄土是無生忍菩薩浄業所レ起。阿弥陀如来法王所レ領。」[13]・「仏土不可思議。有二二種力一。一者業力。謂法蔵菩薩出世善根大願業力所成。二者正覚阿弥陀法王善住持力所レ摂。」[14]・「応レ知下此三種荘厳成就由三本四十八願等清浄願心之所二荘厳一。因浄故果浄。非中無レ因他因有上也。」[15]と述べている。このように曇鸞は、極楽が法蔵菩薩の願業力により建立されたことをくり返し強調している。曇鸞がかかる点を強調するのは、『大論』が説示する菩薩の浄仏国土行により建立された清浄仏国として極楽を捉えようとする意図が彼に存在したからであろう。

次に最初に掲げた『大論』巻第三十八のⒷに関連する曇鸞の理解を考察したい。彼は『論註』巻上　大義門功徳の註釈において、『往生論』が「大乗善根界（中略）二乗種不レ生[16]」とする点に対し、『大論』巻第三十四に「諸仏多以二声聞一為レ僧無二別菩薩僧一。（中略）有レ仏為二一乗一説レ法純以二菩薩一為レ僧。有レ仏声聞菩薩雑以為レ僧。如二阿弥陀仏国一菩薩僧多声聞僧少。[17]」とあるのを引き、極楽に声聞が存在することを説く経論の一例証としている。この他、『大論』巻第九十三には「問曰。余仏有二三乗教化一豈独劣耶。答曰。仏出二五濁悪世一。於二一道一分為二三乗一。問曰。若爾阿弥陀仏阿閦仏等不下於二五濁世一生上。何以復有二三乗一。答曰。諸仏初発心時。見下諸仏以二三乗一度中衆生上。自発レ願言我亦当下以二三乗一度中衆生上。[18]」として、極楽には願によって三乗が存在するがごとく記されている。曇鸞が『論註』巻上　大義門功徳の註釈で例証するごとく、『大論』・『十住毘婆沙論』及びいわゆる浄土三部経には極楽に声聞が存在するとされている。しかるに彼は『往生論』の記述に基づき極楽に声聞の存在を認めず、ただ声聞の来生する点を認めて、諸経論が声聞の存在を説くのは来生した声聞を本名で示しているためであり、来生した声聞は仏力によって無上道心を発すからもはや声聞ではないと理解している。この彼の理解は被註釈書である『往生論』を優位に置いたものであり、さらに阿弥陀仏及び極楽の働きである仏力を強調することによって、極楽そのものの価値を高めるものであると云えよう。即ち彼はかかる理解を通して、一方において極楽が純菩薩国土であるとすることにより、極楽に声聞・菩薩が混在すると云う『大論』等の立場から一歩極楽の大乗性を高め、他方において声聞が極楽に来生することにより菩薩となるとして、極楽そのものの働きを強調していると云えよう。彼のかかる理解はまた結果的には、『大論』巻第三十八において清浄仏国土には一般に声聞の存在を認めないとする清浄仏国土の一般概念に極楽を結びつけることになっているとも云えよう。即ち彼が『論註』において先の『大論』巻第九十三の文をあえて無視するのは、これが明らかに仏願によって極楽に三乗の教えの差別が存在することを示すものであり、『大論』の菩薩の浄仏国土行によって建立された清浄仏国の一般概念において極楽を理解し、その第一のものとして極楽を位置づけようとする彼の意図に反するものであったからではなかろうか。『大論』巻第十二には「問曰。更有二十方諸清浄世界一。如二阿弥陀仏安楽世界等一。何以故。但以二普華世界一為レ喩。答曰。阿弥陀仏世界不レ如二華積世界一。何以故。法積比丘仏雖下将二至十方一観中清浄世界上。功徳力薄不レ能レ得レ見二上妙清浄世界一。以レ是故世界不レ如。[18]」として、極楽が清浄仏国中、低位に置かれている。従ってこの『大論』の立場に対して、彼は極楽の大乗性を強調し、浄仏国土の一

般概念において極楽を捉えることにより、極楽の価値を高めようとするのではなかろうか。このような彼の考えは『論註』初頭の難易二道判と密接に係っている。即ち彼は現実を五濁・無仏と捉え、また八番問答において現実の願生者を主に『観経』の下品下生によって捉えることにより、かかる現実の衆生が救済されるのは、仏願力所成の畢竟成仏の道路である極楽へ、信仏因縁によって往生すると云う、仏願業力に基づく易行道こそが最勝の道であるとする立場において、極楽を唯一最適な清浄仏国として選取している。従って彼はかかる立場において極楽を清浄仏国中、第一のものとするのである。

このように曇鸞は極楽を『大論』に説示される菩薩の浄仏国土行により建立された清浄仏国として理解するのである。さらに彼はその清浄仏国にいかに往生するかを問題とし、極楽の有する働きを強調することによって、往生乃至は成仏の易行性を主張し、ここに清浄仏国中の第一のものとして極楽を位置づけ、これを選取するのである。従って彼は『大論』によって極楽を清浄仏国と理解しつつも、さらに『大論』を超えて極楽を清浄仏国中の第一のものとしている点及びそこへの往生を積極的に示す点が『大論』の極楽の理解と相違していると云えよう。このような彼の見解において極楽の清浄性が強調されているのである。

1 『大正』五〇・四七〇・上
2 『講座大乗仏教』5所収「浄土思想の成立」二一一頁
3 『大正』二六・二三三・上
4 同　右　二三一・上
5 同　右　二三二・中
6 『大正』四〇・八三〇・上
7 『大正』二五・三四〇・上
8 同　右　七〇八・下
9 同　右　三四二・下〜三四三・上
10 『大正』四〇・八二七・下
11 同　右　八二八・中〜下
12 同　右　八二八・上
13 同　右　八二九・上
14 同　右　八三六　中
15 同　右　八四一・中
16 『大正』二六・二三二・上
17 『大正』二五・三一一・下
18 同　右　七一二・上
19 同　右　一三四・中

（知恩院浄土宗学研究所研究助手）